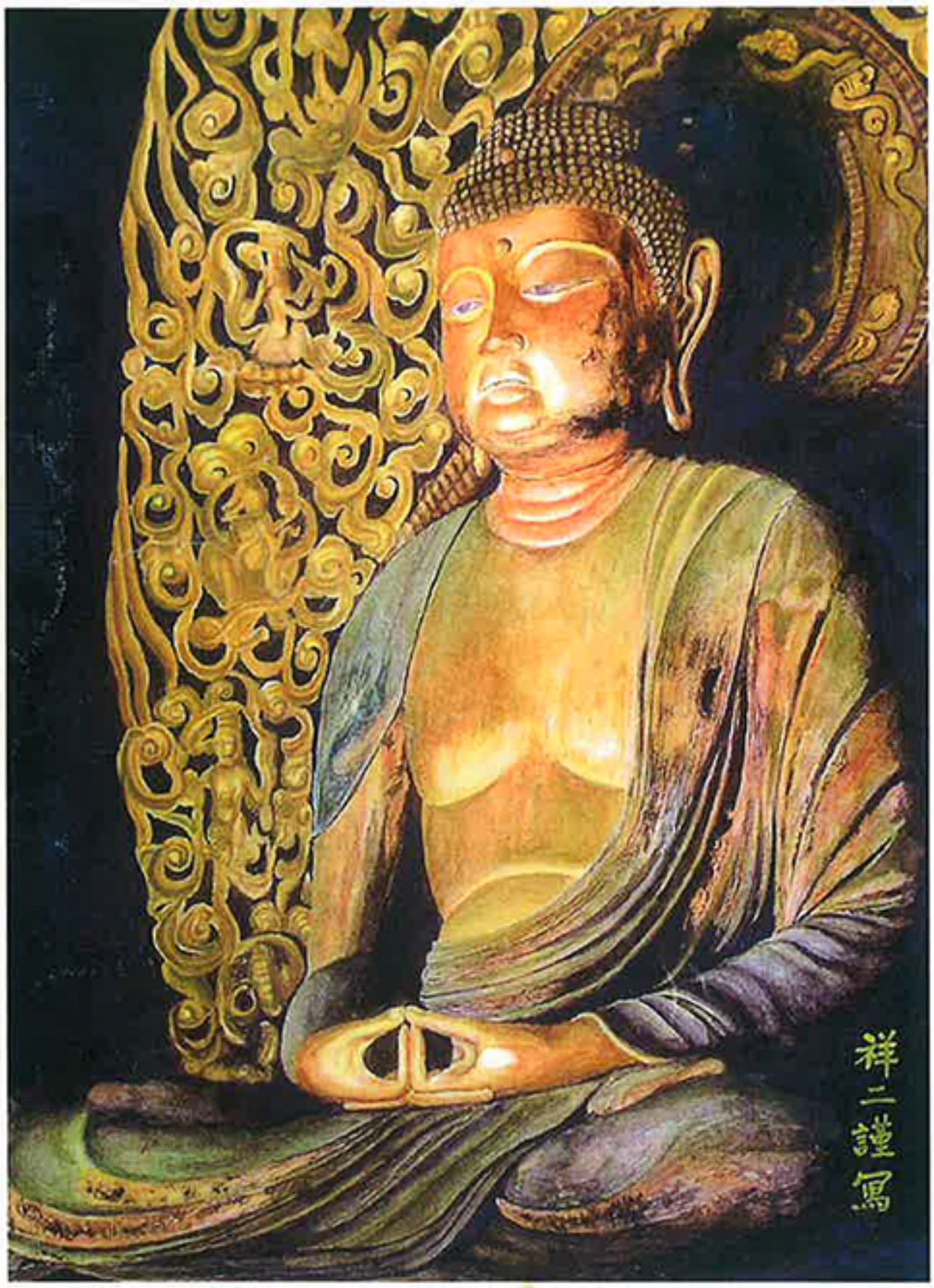
地ひびき



316号

わが心の弥彦

丸岡　稔

この7月8日から、弥彦の丘美術館で「わが心の弥彦」と題して私の風景画展が始まりました。越後一の宮として、広大な神域を有する弥彦神社は、年間を通じて参詣人が絶えません。

一昨年の2月から3月にかけて、弥彦村と教育委員会と美術館の主催で、「雲を追って」と題した私の個展を開いてもらいましたが、私のように仕事の傍ら70年も絵を描き続けてきた、ただそれだけで他に特別な肩書きもないものが、美しい弥彦の丘のこの素晴らしい美術館で取り上げてもらったことは、真に有難い事でした。新聞やTVで紹介されたこともあり、大勢の人が観に来て下さり、この美術館入場者数の新記録だと言われてびっくりしました。

そんなことがあって間もなく、「弥彦」をテーマにした展覧会をという話がもち上がりました。越後で生まれ育った私には、弥彦は特別なところでした。子供の頃から、学校でも家庭でも教育の根幹に「敬神崇祖」があり、小学6年の修学旅行で、初めて弥彦神社の玉砂利を踏んだ時の足の感覚を今でも覚えているのです。

今から20年以上になりますが、私が小学校のクラス会の幹事になった時、躊躇なく場所は弥彦でと決めました。参道入口に一番近い旅館を会場にしました。2年の時と5年の時の担任の先生がご健在だったのでお呼びしました。2年の時の小田イシ先生は、新卒で赴任した私たちの母校で、最初に受け持たれたのが私たちだったのです。絵がお好きで、私の絵を最初に賞めて下さった先生でもありました。晩年は山北に住まわれ、地ひびきの同人にもなって頂きましたが、熱心な仏教徒でもあり、弥彦ではインドを訪ねた時のことを熱っぽく話して下さったのを憶えています。

さて、弥彦をテーマにと制作に取り組んだものの、最初の1年間はスケッチポイントを探して、その周辺を時間が出来ると走り廻っていただけでした。そんな私を見ていて、時々同行していた濁川君はかなり心配していたようです。2年目の季節が巡って来た時、作品はまだ3点しか出来ていなかったのですが、自分の心の中に明らかに芽生えて来た変化がありました。634mの弥彦山の頂上から眺めるとよく分るのですが、眼下に拡がる広大な越後平野は、まさに豊饒の大地と呼ぶにふさわしいものであります。その大地の一隅で、弥彦の山に向き合っていますと、太古の人々が、自然に対して深い畏敬の念を抱き、そこに神々の存在を信じたことがよく分り、いつの間にか自分も同じ気持になっているのでした。これまでの1年間は絵になる場所にこだわって、仕事が進まなかったのですが、「今のこの気持を描けばいいのだ」と気がつきました。今回の出品作品20点の殆どは、その後に描いたものです。日が長くなり、日の出が早くなると、朝起きの得意な私は暗い中に家を出て、夜明けと共に描き始めることも度々あり、夕日の時は、午後7時過ぎになって筆を執るということもありました。弥彦の神様が導いて下さった

ように思われました。

こうして7月8日、オープンの日を迎え、大勢の方が開場のセレモニーに参加して下さいました。

7月14日の新潟日報文化欄に、20数年前、長岡造形大学を創った前理事長でもあった豊口 協先生の「神が作る汚れなき世界」というタイトルで、私の展覧会を紹介する文が載りました。

豊口先生とは優れた造形作家であると共に立派な教育者であり、常々優れたリーダーとはこういう人を言うのだろうと尊敬している人ですが、いつも言っておられることは、この自然は神様が作られたものだから決して傷つけたり破壊してはならないということです。

新聞の文章の中で次のようなことを書いておられます。

「古代からこの地を守り育て続けた天香山命と丸岡　稔との対話の世界には、移り行く自然環境の姿を基本に、自然の懐深く生きるすべての命との作法の世界を求め続けているのではないだろうか。丸岡 稔の作品の前に立つとき、人々は、神にしかなすことのできない〝景色〟の世界に、改めて感動と感謝と、そして、祈りを捧げるに違いない」。私には勿体ないような言葉ですが、写生画家としての日頃の姿勢。色彩や形を写すのではなく、風や気温やいろいろな音や匂いなども現わしたい、刻々と変わる自然の息遣いなども描きたい、そう思いながら現場での制作にこだわる姿勢。そして今回弥彦に2年間向き合って感じたこと、そんな私の気持を温かく包んで下さった言葉として素直に受け取ることにしました。そして又、これからの新しい課題を頂いたのだと思っています。